強電戦略

森 上総です。先週の問題いかがだったでしょうか。「『ルブラン法』なんて聞いたことがないよ!」って人も多いんじゃないかと思いますが、きっちり問題文から情報を拾い上げていけばある程度は解けるハズです。どれだけ切り崩せたでしょうか。

それでは、まずは前回の問題の解答です。

<解答>

問 1

ア:ソルベー

イ:アンモニアソーダ

ウ:水銀

エ:陽イオン交換膜

才:環境

問 2

反応1

 $2NaCl + H_2SO_4 \rightarrow Na_2SO_4 + 2HCl$

反応2

 $Na_2SO_4 + 2C + CaCO_3 \rightarrow Na_2CO_3 + CaS + 2CO_2$

問 3

 $Na_2CO_3 + Ca(OH)_2 \rightarrow 2NaOH + CaCO_3$

問4

(i) 燃える性質をもち、負の質量をもつ元素。

(ii) c (iii) e (iv) d

問 5

極めて pH の低い水溶液を排出することになるため、 生態系に影響を及ぼし、また生活用水や農業用水な どの確保を困難にする。 問 6

反応4

 $4HCl \ + \ O_2 \ \rightarrow \ 2Cl_2 \ + \ 2H_2O$

反応5

 $Cl_2 + Ca(OH)_2 \rightarrow CaCl(ClO) \cdot H_2O$

問 7

硫化カルシウムは雨水中の炭酸と反応し、有毒で腐卵臭をもつ硫化水素を発生するため。

問8

反応 6

 $CaS + CO_2 + H_2O \rightarrow H_2S + CaCO_3$

反応 7

 $2H_2S + 3O_2 \rightarrow 2SO_2 + 2H_2O$

反応8

 $SO_2 + 2H_2S \rightarrow 3S + 2H_2O$

問 9

- (i) NaCl + NH₄HCO₃ \rightarrow NaHCO₃ + NH₄Cl
- (ii) 加熱により熱分解し、派生する二酸化炭素により食品中内部に気泡が作られるという性質。

問 10

6.2(kg)

問 11

- (i) 酸化鉄を触媒とし、高圧・常温より高い温度 で、体積比 1:3 で窒素と水素を直接反応させ アンモニアを得る方法。
- (ii) ハーバー・ボッシュ法

問 12

 $2NH_4C1 + Ca(OH)_2 \rightarrow 2NH_3 + 2H_2O + CaCl_2$

問 13

 $2NaHCO_3 \,\rightarrow\, Na_2CO_3 \,\,+\,\, CO_2 \,\,+\,\, H_2O$

強裁戦略

問 14

- (i) ルブラン法は環境に付加をかける不要物質を 生産過程で生じたが、ソルベー法は不要物質と して塩化カルシウムしか生じない。
- (ii) 炭酸水素ナトリウムは溶解度が小さいので溶解度積が小さく、系の他のイオンの組合せのイオン積がその溶解度積に達する前に、炭酸水素ナトリウムのイオン積が溶解度積に達し、沈殿を生じるため。
- (iii) 炭酸水素カリウムの溶解度は、系の他のイオンの組合せで生じる物質と比べあまり小さくないので、得るのは難しい。

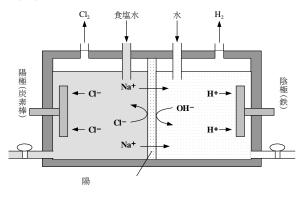
問 15

(i)

陽極: $2Cl^- \rightarrow Cl_2 + 2e^-$

陰極: $2H_2O + 2e^- \rightarrow H_2 + 2OH^-$

(ii)



<解説>

間 1

ウ.オ:

水銀を電極に用いると、水素イオンではなく金属イオンが還元されるという特徴がある。また、水銀は多くの金属と容易に合金を作る(この合金をアマルガムという)。

そのため,

 $Na^+ + e^- \rightarrow Na$

という反応で生じたナトリウムが水銀と合金を作 るので、この合金を水に加え、

 $2Na + 2H_2O \rightarrow 2NaOH + H_2$

という反応を起こすことにより、水酸化ナトリウム を得る。ただし、水銀の蒸発・流出などにより付近 の環境に悪影響を与える恐れがある。

問 2

反応1は実験室的に塩化水素を発生させる組合せで あり、その反応は、

 $NaCl + H_2SO_4 \rightarrow NaHSO_4 + HCl$

であるとされるが、本問のように 800℃という高温 では、硫酸は2価の酸として働くこととなる。なお、 これらの反応はいずれも中和反応(揮発性酸遊離反 応)である。

反応2の記述だけでは反応を判断しづらいが,反応2で残渣に硫化カルシウムが含まれていることがヒントとなる。すなわち,硫酸イオンが木炭に還元されているということが分かる。硫酸イオン中の硫黄の酸化数が+6であり,硫化物イオン中の硫黄の酸化数が-2なので,硫酸イオンは8価の酸化剤,木炭は単体から二酸化炭素に変化しており、0から+4へ酸化数変化しているので4価の還元剤。よって物質量比1:2で反応する。

問 3

 Na_2CO_3 , $Ca(OH)_2$, 2NaOH, $CaCO_3$ のうち、炭酸カルシウムの溶解度が極めて小さく、沈殿させ除去することができる。

問 4

- (ii) ラボアジェの発見した質量保存の法則から, 燃焼は空気中の酸素の化合であることが分かった。
- (iii) アボガドロの法則から, 気体の密度と分子量 が比例することがわかる。より実際の密度に近



い分子量となるように訂正したわけである。

間 6

反応4

塩化水素が1価の還元剤,酸素が4価の酸化剤として働く酸化還元反応。なお,触媒に塩化銅(I)を用いる。

反応5

塩素が水に溶けて生じた酸が、水酸化カルシウムと 反応すると考えればよい。

Cl₂ + H₂O
$$\rightarrow$$
 HCl + HClO
HCl + HClO + Ca(OH)₂ \rightarrow CaCl(ClO) · H₂O + H₂O

問 7

次のような中和反応(弱酸遊離反応)が起きると考えられる。

$$CaS + H_2CO_3 \rightarrow H_2S + CaCO_3$$

問8

反応 6

問7の解説で示した反応と同様の中和反応である。

反応7

硫化水素が6価の還元剤,酸素が4価の酸化剤として働く酸化還元反応である。

反応8

硫化水素が2価の還元剤,二酸化硫黄が4価の酸化剤として働く酸化還元反応である。

間 9

(ii) 炭酸水素ナトリウムはベイキングパウダ(ふくらし粉)として用いられる。重曹という名称は、かつては炭酸水素ナトリウムを「重炭酸ソーダ」といっていたことに由来する。

問 10

 $2NH_3 + H_2SO_4 \rightarrow (NH_4)SO_4$

と反応するので、アンモニアの物質量の半分の硫酸 アンモニウムが得られる。よって,

$$1.0 \times 10^{6} \times \frac{8.0}{100} \times \frac{2.0}{100} \times \frac{1}{17.03} \times \frac{1}{2} \times 132.18 \times \frac{1}{10^{3}}$$

$$= 6.20$$

問 11

(i) アンモニアの生成速度を上げるには高温・高 圧が望ましい。一方、アンモニアの収率を上げ るには低温・高圧にする必要がある。このため 現在、圧力は 1000 気圧以上の高い圧力下で反 応させるが、温度は 400~500℃程度の条件下で あり、さほど高くはしない。その分、触媒によ り反応速度を増大させている。

問 12

中和反応(弱塩基遊離反応)である。

問 13

炭酸水素イオンの間で水素イオンが授受され、炭酸 イオンと炭酸が生じる、と考える。

問 14

(i) 解答に示した以外の理由としては、ルブラン 法は高温を要するのでコストがかかる、得られ る炭酸ナトリウムの純度が低い、などが上げら れる。

問 15

- (i) 電気分解において、陽極では酸化反応が、陰極では還元反応が起きる。
- (ii) 陽イオン交換膜は陽極側の塩化物イオンが陰 極側に流入するのを防ぐ。

強裁戦略

いかがだったでしょうか。

問4のような問題は私的にはとてもワクワクします。「豆知識」とか「クイズ」とかが好きな性分ですので。

そういえば先だって、ある高校の文化祭を見学させて頂き、化学研究部が作成された「化学クイズ」の問題を解かせてもらいましたが、本問の答えとなっていたラボアジェに関しての出題で「ラボアジェの死因は何でしょう?」(大意)というものがあり、ニヤニヤしてしまいました。

脱線ついでにもう一つ。同じく問4の答えとなっているベルセリウスですが、クイズ番組やクイズ大会ではよく見かける問題です。クイズは「ほとんどの人が知らないようなこと」より「聞いたことはあるけどそこまで深くは知らないこと」の方が問われやすいです。「元素記号がアルファベットで表記されるのは知っているけど、それを提唱した人なんて知らないよ~!」って、まぁなるじゃないですか。クイズ作問者的にはこういうのが、冥利な訳です(笑)先述の高校の文化祭で、クイズ同好会が作成された「ペーパークイズ」もチャレンジさせてもらいましたが、「pHの概念を考え出したのは誰でしょう?」(大意)という問題がありました。これなんかも、楽しい問題じゃないでしょうか。

閑話休題。内容に触れておきましょう。

反応3,5,8,9,10,11は無機化学で頻出の反応です。書けなかったという人は要復習!ただ,丸暗記はやめましょう。解説中で触れていますが,無機化学に登場する化学反応の多くは,実は中和反応であったり、酸化還元反応であったり。すなわち,理論化学の考え方を用いて書くことができる反応であるといえます。どのような理由で起きる反応かしっかり考える癖をつけましょう。

反応 1, 2, 4, 6, 7は目新しいです。しかし、し

っかりと考え方が身についている人ならある程度類 推できたのではないでしょうか。さらにいえば、こ れらの反応を書く上でのヒントは本文中、随所に散 りばめられています。例えば、反応1や2は下線部 (1)付近だけでは情報不足ですが、その4段落下のル ブラン法の問題点に関する記述と結びつけられれば 書けたんじゃないかなと思います。

まとめましょう。化学を勉強して行くにあたり、 闇雲に暗記する、といった方法は非効率的です。暗 記不可避な事項もありますが、まずはしっかりと適 切な考え方を身につけた上、問題文中のヒントを見 落とさない注意力、ヒントを使いこなすだけの思考 力を磨いていきましょう。

今年一年(とはいえもう2ヶ月も過ぎています。内輪ですが研伸館の年度でいえば3ヶ月です!)化学を勉強していく上で、意識しておいてくださいね!